

松山幸生先生講述

ヘブライ人への手紙に学ぶ

1996年1月から1998年10月

全32回--22

2023年05月

写者

小原靖夫

第22回 信仰の先達として証しされた人びと②

信仰の父アブラハム

第11章⑧節から⑫節 信仰

- ⑧信仰によって、アブラハムは、自分が財産として受け継ぐことになる土地に出て行くように召し出されると、これに服従し、行き先も知らずに出発したのです。
- ⑨信仰によって、アブラハムは他国に宿るようにして約束の地に住み、同じ約束されたものを共に受け継ぐ者であるイサク、ヤコブと一緒に幕屋に住みました。
- ⑩アブラハムは、神が設計者であり建設者である堅固な土台を持つ都を待望していたからです。
- ⑪信仰によって、不妊の女サラ自身も、年齢が盛りを過ぎていたのに子をもうける力を得ました。約束をなされた方は真実な方であると、信じていたからです。
- ⑫それで、死んだも同様の一人の人から空の星のように、また海辺の数えきれない砂のように、多くの子孫が生まれたのです。

今日は11章⑧節から学んで行くことになるわけですが、この11章は前回学んだ①節②節に記されている「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。昔の人たちは、この信仰のゆえに神に認められました」という書き出しによって始められています。そして今回は、この部分を、「より具体的に人物を取り上げ、あるいは事実を取り上げながら例証してゆく」という形で書かれています。

先ず「信仰の父アブラハム」という人物について心を向けてゆこうと思いますが、この「信仰；ピステイス」という言葉には、他に、信頼、誠実、約束、確証など色々な意味があり、一般的には、自分の内的ないし靈的充足状態とか、神から賜っている御恵み、御導きなどの意味に捉えられているのですが、この手紙では、旧約の流れの中で、数点のことを特に強調して記されています。

一つは、「神が示される啓示を、今、目の前にそれが形あるものとされなくとも、既に真実な姿で内在しているものとして受け取ること」、これが「見えない事実を確認する」と

いう①節の言葉と共通して来るのです。その意味では、＜信仰＞とは、神の真実であるとか、偽りのない確かさであるとか、神への誠実、忠実であるとかいう言葉と同義語として訳されてゆくことが多いのです。

ところが、もう少しよく聖書を読んでゆきますと、神への全き信頼の中で、「神の啓示自体を、恭しく愛の応答をもって受け止めてゆくこと」が、＜信仰＞という言葉の中に含意されていることを知ります。もっと積極的な意味では、その啓示に対して揺るぎない確信、確固たる信頼感を抱くこと。たとえ現実はその啓示とは全く相反した状態にあらうとも、唯、神を信ずる意志を貫いてゆく、そのような「非常に密度の濃い関係において神と共にあることが＜信仰＞なのだ」という見方をしています。そのような信仰を有していたことで第一に取り上げられるのが、このアブラハムという人物であり、「信仰の父」と称えられる所以なのです。

しかしながら、私たちは、＜信仰＞という中に、とかく＜自分＞を持ち込むことが多いように思います。例えば、＜自分＞が神に対して何かをお願いすれば、それを聞き遂げてくださるに違いないと思う。「神に対して祈り願っている自分」イコール「信仰を持っている自分」という捉え方をする。それは、聖書が「信仰によって」と描いてゆく＜信仰＞の実像とは全く意味内容が違います。

それはある意味、自分勝手な願い求めの所作にすぎず、＜信仰＞というものではないのです。あるいは、神の御約束に対して、「私たちはそう信じていますから、いつか、きっとそうしてくださるでしょう。今はまだ得られていないのは、私たちの祈りと努力が足りないせいなのです。」みたいな信仰形態があるのですが、それもここで語られている＜信仰＞ではありません。³⁵

それで著者は「今はまだ得られていないのではなく、あなたがそれを感じ取っていないだけなのです」というアプローチの仕方をしてゆくわけで、それが、これから語ろうとしている＜信仰＞というものの内容なのです。

確かに色々な意味で＜信仰＞ということが問われるわけですが、今日ここで登場して来るアブラハムという人物については、最初にこんなことがありました。³⁶

第⑧節、

信仰によって、アブラハムは、自分が財産として受け継ぐことになる土地に出て行くように召し出されると、これに服従し、行き先も知らずに出発したのです。

これは、創世記に出て来るアブラハムの召命の証しですが、彼が踏み出した第一歩、そこから、「神の歴史」としてのイスラエルの歴史が始まるのです。

ですから、このところはとても重要な箇所、しっかり目を凝らし、思いを傾注して、そこで何が語られ、何が告げ知らされているのかということ把握しなければ「イスラエルという民族と、その成立の理由は分からない」ということになります。

使徒言行録第7章に、大祭司の前で説教を行ったステファノが、その後、石打ちの刑で殺されるくだりが記されていますが、その説教において、彼はアブラハムの召命の証しを連綿と語っているのです。

「私たちの父アブラハムがメソポタミアにいて、まだハランに住んでいなかったとき栄光の神が現れ、『あなたの土地と親族を離れ、わたしが示す土地に行け』と言われました。それで、アブラハムはカルデア人の土地を出て、ハランに住みました。神はアブラハムを、彼の父が死んだ後、ハランから今あなたがたの住んでいる土地にお移しになりましたが、そこでは財産も何もお与えになりませんでした。一步の幅の土地さえも。しかしそのとき、まだ子どものなかったアブラハムに対して、『いつかその土地を所有地として与え、死後には子孫たちに相続させる』と約束なされたのです」と。37

ステファノは「これがイスラエル民族の原点なのだ」ということを非常に強く語っています。彼の説教の中で、面白いなと思うことは「アブラハムは神の御言に従って出かけて行きましたが、彼はその土地を自分の所有にすることはできなかった。」という点です。ステファノの言葉を借りると、「一步の幅の土地さえも得ませんでした。しかし、行けと言われたのでそこに出て行ったのです。」出て行ったからといって、その土地が得られたわけではないのです。その辺が、私たちの信仰とどう関わって来るのかなと思います。

私たちには「信じてさえいれば、与えられる、獲得できる、だから頑張って信じましょう」みたいなところがありますが、ヘブライ人の信仰では「信じるということは、獲得できなくても、信じることだ」というところが中心になるわけです。ここをしっかりと押さえておかないと、「アブラハムが先祖の土地を離れたことが、もっと良いものを得るためであったならば、たいして価値のないものは捨ててもいいではないか。」となるのです。

ですが神は、彼に何かをお与えになろうとする時、彼の持っている『最良のものを捨て去ること』をお求めになった。アブラハムが＜信仰＞において、その受け止めができなかったならば、『神の歴史の最初の一步』という意味は消え失せていたでしょう。

キリスト・イエスの御恵みとか、神の御恩寵という、聖書が告げる福音を、現実世界の良きものと混同して受け止めようとするならば、私たちは決して福音を福音とすることができません。「捨てて行きなさい、放棄して行きなさい。」と命ぜられる痛みが、＜自分＞の信仰の中で大きなウエイトを占めてゆき、耐え難いことになるからです。38

更に「神が仰ったのだから、得られるのです」この信仰に間違いはありませんが、「仰ったのだから」ということと「得られるのです」という間には、すごく長い距離があるかもしれない。これもまぎれもない神の真実なのです。

私たちの知恵とか思いとか経験というもので押し量ることができない長い長い時間、大きな忍耐の期間がそこには横たわっているかもしれない。「それを私たちが受容しない限り、神が与えてくださった御約束は私のものにはならない」という部分を、ここでしっかりと踏まえていなければなりません。

この⑧節は割合淡々とした筆致で書かれていますが、その中にこれだけの重さがあるのです。アブラハムはまず、当時非常に進んでいた文明文化をもったカルデアに住んでいました。ところが神は「お前はそこから出てゆきなさい」と仰った。

「自分の生活の安定・安住の感覚が一杯ある中で、お前はいつまでもそんなものに寄り縋って生きていてはならない。

お前は創られたものに過ぎず、たいした価値も値打ちもなく、どこからも信頼されないような小さな存在であることをしっかり認識しなさい。そして、そんなお前が歴史の中で価値と意味を持つことがあるとすれば、わたしがお前に語りかけ、わたしの言葉がお前を動かしているという事実の中でしかないのだ。」これが、神がアブラハムをお召しになった重要なポイントだと思うのです。

アブラハムはその御声に聞き従って旅立った。³⁹

私たちには、神から御声をかけられたら『一切を捨てて』という部分が、なかなか受けとめ切れない。言い換えれば、私たちは、すでに神から与えられて、恵まれたものとして受け止めている良きものさえも、時にはかなぐり捨てさせられて、ただひたすらに神の御言に従わなければならない。これはものすごい使命の遂行だと思います。しかし神を神とするとはそういうことなのです。

日本人を初めとし、キリスト教的な観点を有している人々が、他者への愛の配慮や同調同感、受容や寛容などに基づいた社会平和や共生を目指す発想を抱き、そうした自分の生き方を肯定している背景に「所謂キリスト教的なヒューマニズム」というものがあります。それは、「神がすべてを創られ、愛され、おゆるしになっておられるのだから、私たちはこの世界をすべて神の御恵みとして受け止めていきましょう」というもので、そこでは、吟味もされずに「皆良きもの」として、現実の価値観の体系も、現実のもっている様々な文化、伝統、社会常識なども、そのまま丸ごと、鵜呑みの受容をされてしまっています。

ところが、アブラハムに神がまず言われたのは「あなたは故郷を捨てて」でした。言い換えれば、「今のあなたに付随している一切のもの（好ましい良きものが沢山ありましょうが）それらを全部捨て去り、何一つ持たない者のようになり、裸になってわたしの前に出て来なさい。その上で、わたしの言葉に従いなさい」ということだったのです。

彼の存在を誰も知らないところ、彼が長年培ってきた経験値が何も役に立たないところへ出て行きなさいと、ある日突然、神から命ぜられたのです。

私たちの<信仰>は、そう告げられた時、即「はい」と答え、従える信仰なのかなと考えますと、「獲得型の信仰であって、放棄型の信仰でない場合が多い」ことに気づきます。

「神を信じれば何かを得られる、だから私は神を信じるのだ。信じると、きっと素晴らしい報いが与えられる、だから信じましょう」という宗教観がある。これは今日ある意味で

は、大いに流行っています。その流行りの中に取り込まれてしまうと、キリスト者も下手をすれば同じようなことを言い出す始末となるでしょう。

有名な主の御言には「すべて重荷を負って苦勞している者はわたしのもとに来なさい、休ませてあげよう」がありますが、これは大体そこまで終えてしまうことが多いのです。ところが「休ませてあげよう」の続きには「わたしが与える軛は負いやすく、わたしの荷は軽いから、そっちを代わりに背負いなさい」という意味の御言があるのです。ですから「休ませてあげよう」と主が仰っても、それは、完全休息でもなければ、全面安息の保障でもないのです。つまり「自分が今まで背負ってきた古いしがらみを全て捨て去り、神との間に結ばれた新しい絆の中で生きてゆきなさい、それが『休む』ということなのです」と。(アウグスチヌスは「あなたは私たちを、あなたに向かうようにお造りになられたので、私の心は、あなたの内に憩うまでは安息を得ないのです」と言っている。作者追記)

換言すれば、人間が神に創られた人間らしく生きるとは、被造物相互のしがらみ(腐れ縁)の中だけで生きてゆくことではなく、自分を創られた御方との聖なる絆の中で生きて行くことなのです。そういう極端なことがここでは語られているのです。そのことこそを、信仰の父アブラハムは、受け入れたのです。

私たちは「どこそこへ行きましょう」と言われると、「どこに行くんですか、そこにはどんな良いことがあるんですか」と聞き返します。特に海外旅行などの場合は、「その国にはどんな危険があるんですか」などという心配もします。でも、いくら私たちが安全安心を思って調べてみても、どうしようもないものもあります。というのは、相手は私たちと全く違った次元、発想でものを考えている場合もあるわけで、そういう人々の前に連れ出された時には、彼らの考えなど理解できないことがあるのは当然です

ですが、神は「そういう思惑で物事を計るのはやめなさい」と仰っているのです。しかも何も検討の余地を与えず、神は「『わたしが行け』と言ったら、黙って『はい』と答えて行きなさい」と命ぜられるのです。「どこへですか」と尋ねても、ただ「行け」と仰るばかりですから、とんでもない話ですが、それを、アブラハムは『やってのけた』のです。

ある人は「アブラハムは75歳にもなっていたから、彼は所謂『定期モニター』だった。だから行けと言われても、とんでもないところには行かされるはずはないと信じていたし、ある程度ジャイロコンパスみたいなものを持っていただろうから、どっちに行っても大丈夫だと安心していただろう。」と物知り顔で仰るのですが、そうではないのです。

文化圏に育った人間は、極めて原始的な状況下では弱いのです。温かい気候で育った人間が厳寒の中に入ったら、一気にやられてしまいます。アブラハムは、正に温室育ちの人間でしたが、その人がいきなり荒野に放り出されるわけで、75年経験してこなかった全く新しい経験を始めるわけです。が、そこに意味があるのです。今まで連綿と積まれてきた経験値が一切意味を為さない所に出て行きなさいと、神が敢て命ぜられたのですから。

まさしくアブラハムは「出て行けと仰ったのは神なのだから、私はお従いします」のひと
言だけで従って行きました。「私を創った御方が私を一番よく知っておられ、その御方に
従うことが、私が私らしく最も素晴らしく生きる方法なのだから」と堅く信じ、彼は出て
いったのです。こういうことがこの⑧節のところで出て来るわけです。

第⑨節、

信仰によって、アブラハムは他国に宿るようにして約束の地に住み、同じ約束されたもの
を共に受け継ぐ者であるイサク、ヤコブと一緒に幕屋に住みました。

これは創世記23章にも出て来ますが、「私は、あなた方のところに一時滞在する寄留者
であります」という言い方でアブラハムは自己紹介をしています。彼には「自分の生涯
は旅人でしかない」というものの見方があり、私たちクリスチャンの発想とはすごく違っ
ているな、と思うのです。

私たちには、どこか身を寄せられる、様々な困難から解放される静けき港がある。その港
に向かって主は今日も明日も導いてくださるのだから、主に従えば、やがてその静けき港
に着けるのだ。そして「そこまでの我慢、辛抱だよ」などと言いますが、アブラハムも最
初は、そのように導き出されたハランという所にいったんは住んだ。けれどもそれは彼が
永遠に住み着く場所ではなかった。だから、神に行けと言われてたら、また旅立っていく。
そのように彼は常に神の御声を聞きながら、一步また一步を踏み出して行くことしかでき
ない存在だったのです。

つまり、「ここは私の領分だ」と場所を構えてデンと腰を据えられない存在であって、い
つでも神の呼びかけに即答して立ち上がる、そういう生き方をして行かねばならないと彼
は自覚していたのです。

勿論、その背景には、イスラエル民族が遊牧民(ベドウィン)生活をして来たという特別な
生活条件があります。が、いつでも神の言葉に即応できるように生きて行かなければなら
ないという<信仰>が、アブラハムにはきちんとあったのです。

先程のステファノの説教によれば、アブラハムは生涯の中で、「神は財産も何もお与えに
なりませんでしたが、一步幅の土地さえも。」とありますが、実は、彼は歴史の中に自分の
土地を確保していたのです。

それは、あのマムレの前にある小さな土地です、エフロンという人から400シケルを払っ
て、自分の奥さんの遺骸を納めるお墓にする洞穴をその周辺の土地と一緒に買い取りまし
た。これがアブラハムの唯一の所有地なのです。しかも歴史の中では、それはすごく重要
な意味をもっています。アブラハムが亡くなった時にもそこに葬られ、イサク、リベカ、
レアもそのお墓に葬られているからです。

その後に出て来ますが、エジプトで生涯を終えたあの「ヨセフ」も死に臨んで子どもたちに、「私をマムレの洞穴に葬るために、どうかあそこに連れて帰ってください。そして私を葬ってください」と頼みます。彼がなぜそのお墓に執着したのかというと、「それがアブラハムの葬列に加えられることなのだ。自分たちはアブラハムの子孫なのだということが明らかにするためであり、信仰の先達と同じ信仰を抱いて生きたのだということが証明される場所なのだ」と考えたからです。

面白いですね、アブラハムは大成功を遂げた人ではないのです。神から示されて国を出たけれども、彼は自分の所有地としてはこんなちっぽけな場所しか得られなかった。しかし神に従い続けた彼は、それが財産なのだと考えた。後にヨセフも「神に従い続けた人物であったという財産を共有したい、だからアブラハムが葬られたあの墓に自分も葬ってほしい」と。それは凄まじいまでの執念でした。ヨセフはそのために防腐装置を施して自分の遺体を大事にとって置いてもらい、実際に故郷に帰ることを成したわけですから。

「信仰を継承してゆき、あの信仰の葬列隊に自分も加えられることに対する執着」それが一番大事なのだと考えている彼らの生き様は、私たちがしっかりと学んでおかなければならない重要な観点だろうと思います。

「信仰の継承」は色々な形で問題になりますが、「アブラハムは自分の信仰を継承させるための自力をあまり用いなかった。彼は唯ひたすらに神の言葉に従い続けただけだった」毎日、自分にはそれしか使命がないと考えて必死になって神に縋りついた。その信仰的に素なることが、彼に続く者たちにもそのように生きる素晴らしさを経験させたのです。45

ということであれば、自分も信仰の継承を本気に考えて、「まず私が、一切のものを捨てて本気になって神に従い続けて生きてみよう」ということになるだろうと思いますが、どうも今の時代に生きていますと、事はそう単純にはまいません。

今日のこの言葉の中で「アブラハムは他国に宿るようにして約束の地に住み、同じ約束されたものを共に受け継ぐ者であるイサク、ヤコブと一緒に幕屋に住みました」とありますが、この「幕屋」という言葉がここで意味しているものは、旅人として生きる、放浪者して歩むということであり、安住して豊かな富を得たり、明日を心配しないで済むような生活設計を立てたり、ということはできませんでした。

彼は朝毎に神から語りかけられる言葉を聞き、それに従って今日を生きることにすべてを懸けて歩みました。が、私たちの信仰生活は、なかなかそうはならないのです。色々な理屈をつけて「それは時代が違うよ」などと言うのですが、本当にそうなのかなと考えてみると、「そんなに今の時代とアブラハムの時代は違ってはいないのではないか」と私は思うのです。

第⑩節

アブラハムは、神が設計者であり建設者である堅固な土台をもつ都を待望していたからで

す。

なぜ彼が旅人だったかと言えば、神が『都』を用意してくださっておられ、そこに自分は住みたいと願っていたからです。またそのことを神が約束してくださったと信じたから、彼はそのように為したのです。⁴⁶

「この神が設計者である都」とは「詩編87編に出て来る都」です。そこでは「聖なる山に基を置き、主がヤコブのすべての住まいにまさって愛されるシオンの城門よ。神の都よ、あなたの栄光について人々は語る。『わたしはラハブとバビロンの名を、わたしを知る者の名と共に挙げよう。見よ、ペリシテ、ティルス、クシュをも、この都で生まれた、と書こう。シオンについて、人々は言うであろう、この人もかの人もこの都で生まれた』と。」と記されています。

「神がお造りになった都」は、私たちの想像を超えた都、神御自身の御手によって確立される都、その世界のすべてのものが神によって創造されなければ、存在に至らない都。言い換えれば、「私たちの創られた原点」はそこに帰ることであることを信じてアブラハムは歩み続けたのです。この聖なる都については、この他の箇所でも何度も出て来ます。

例えば、ヨハネの黙示録21章では聖なる都が天から降って来るという表現をしていますが、この都は滅びず朽ち果てることがない、変わることもない神の創造の原点、神の意思によってすべてが動いている場所と考えられ、「私たちは何も持たない寄留の旅人です。云々」とヨセフが語ったり、あるいはモーセが語ったりしたことと、皆同じようなことを言ったりしています。

本当に変わらない都、変わることもない神の深い御愛、創造の秩序の中に生きるために、今を生きて行くのだ。パウロの言葉を借りて言えば「やがて私たちに現れようとしている栄光のために、今の苦難を忍ぶのです」と。現状は神がくださる平安とは全くかけ離れた様々な艱難があり、困難、苦悩もある現実の中でも、他ならぬ神が用意してくくださる都に向かって今の一步を歩んでいるのだから、その事柄が決定的に自分を傷つけたり、疎外したりはしないことを承知しておれば、精一杯、今の時を生きられるのだと言っています。

とかく、戦いに勝てるのは、神が御力をもって臨んでくださり、私たちに抵抗する人間を根こそぎ平らげてください、平穏な道が開かれることなのだと考えてしまいがちです。ですが、アブラハムにとっては、決してそのように楽観的に捉え得るものではなかったのです。「現実は、神の御言とは正反対だった」のですから。

「お前の子孫にこの土地を与えるよ」と言われたけれども、それを継ぐ子どもはいない。神の御言に従って歩んでいるけれど、その御約束は少しも成就されて来ない。でも神がそう言われた以上、それは確実にいつかはそうなるのだ、神がこの私を選んでそのようにしてくださっているのだから、と信じるから、多くの人から何と言われようと臆することなく歩み続けて来られた。正にその基本的な力は、唯々<信仰>でした。

私たちは、神が与えてくださる御約束とか先行きに、すぐに確かな応答がないと不安になってくる、あるいは焦り始める、それではいけないのです。

主が弟子たちにその真実をお示しになろうとしたのが、イエスが一緒に舟に乗ってガリラヤ湖の向こう岸まで行かれる時、舟が大波大嵐に見舞われ、今にも沈みそうになった際に弟子たちは熟睡されている主を慌てて起こしたという場面でした。そうした弟子たちの言動に主は「なぜ怖がるのか。信仰の薄い者たちよ」と叱責され、更に大波大嵐をも叱責により凧とされた主に弟子たちは驚き、「いったい、この方はどういう方なのだろう。風や湖さえも従うではないか」と言い出しました。この言動にあきれ果てられた主は、彼らのことを「人々」とされ、御自分とは縁もゆかりもない只の群衆と同扱いにされました。

神が共にいてくださること、その中では嵐が起ころうと何があろうと、それは神のなさる御業に対しては何の妨げになる力にもなりえないことを、信じ切れない現実描写がわたしの中にはありますよと、このように聖書は告げます。そしてそうした現実を目を奪われていると、神を見上げることも信じることもできなくなります。主が共にいてくださることさえも、現実に関係することが起こっているにも拘らず、目を向けられなくなるのです。この世はそれ程に厳しい現実性を帯びています。

しかし、その現実を越えて尚「主は共にいてくださる（インマヌエル）」という気づきがガリラヤ湖上で弟子たちに与えた励ましかったのです。それをお受けすると、自分たちがどこに目を向けているのか、何に価値をおいているのが自ずと分かってくる。

(それに関連して、主イエスに対して弟子ペトロが三度否んだ罪と、それに対し御復活の主がどう為されたのかに関する説教を森 容子牧師に依頼し、最後尾に掲載しました。)

私たちは決断する時、とかく皆はどう思っているだろうかと周りを眺め、一体これで信仰はいいのだろうか、などといつでも問いかけます。その基準になっているのは、何かと言えば、私たちの価値観だったり時代のモラルだったりします。しかし、それは決して聖書からの真理ではないのです。

そのような状況の中で、アブラハムがとことん神に寄り頼んで歩んだのは「終わりの日を知っていたから」なのです。彼は神が設計者であり、神が創られた都に住めると信じ続けていたのです。(神様とアブラハムとの契約で未成就のことがあります、それは未来において必ず成就するという確信的信仰が今も継続しています。)

今、色々な意味で「教会が本当に教会であるために、何が欠けているのか」ということを考える時、一つは、やはり『再臨信仰』の問題だと言われます。49

主がもう一度お出でになり、究極の神の国が確立されるという信仰や待望が欠落していて、「皆が頑張って仲良くなれば、この世においても神の国はできる」みたいな考え方がキリスト教界の中にも蔓延し、それによって支配されていることが多いのです。

この世の常識から言えば、民がそこに安住、定住しうる住居を築かねばなりませんから、そうすると『旅人であること』はできなくなります。そうした設計を始め、作業を進めれば、そこではどうしても自分の思いが先行する、この世の常識が先行してしまいます。一方、神の設計によって物事を為すためには、この世の観点を離れなければ駄目だと創世記でお示しになり、ノアに箱舟を造らせる時にも、わざわざ高い山の上で造らせられた。この世の人の言葉や考え方や誘惑の訪れないところで、舟を造りなさいと命ぜられた。

「私たちは、自分の思い、力、知恵が、周囲の考え方に添って働き、皆が納得してくれることを期待しつつ、そして皆が私たちの信仰を認めてくれるようにと願いながら、生きてしまう」ことが多いのですが、アブラハムは、そうは考えなかった。旅人であるから、わかってもらえなくて当たり前だ、と思った。寄留者なのだから行き着くところまでは気を抜いてはいけないのだ、と考えた。いつでもこの旅を設定なさった御方の声に聞き従わなければいけないのだ、と考えてその生涯を貫いた。

「信仰によって」という言葉は、頭の中で考えてとか、心が熱くなってきてとか、そのように自分サイドで捉えられ易いのです。ですが、「正にこれは、乗るか反るかの土壇場で、自分自身が、神を選ぶか、あるいは、この世を選ぶか、その選択をいつも迫られ続けて生きてゆくことです。その時に、神を選び続けるのが<信仰>なのです。」（これは松山幸生先生がよく説教で最も強くも言われました）

第⑩節までは、アブラハムの旅立ちの問題を軸にしながら語ってきたわけです。

第⑪節前半、

信仰によって、不妊の女サラ自身も、年齢が盛りを過ぎていたのに子をもうける力を得ました。

非常に凝縮した形で書いていますから、この部分も色々な問題が出て来ます。創世記でこの記事は17、18章にわたって書いているわけです。

ところで、サラ自身が、まさかそんなことは起こるはずがないと思っていた。しかし、そのことを神は実現なさった。ここに著者は、無慈悲な言葉を使っています。「不妊の女サラ」と断定的に言っていることです、子を産む能力を持たない女と。

ですから、この世的には絶望状態だったのです。しかもそういう可能性を全面否定されるために、わざわざ、歳が過ぎて月のものも止まってしまう、どう考えても子どもが生まれえない状況に置かれていることをも知らしめられた。だから、どうあっても受胎に関しては不可能な状態でしかなかったのに、そういう状況をあえて設定された神が、その人からイサクを生まれさせられた！

この記事を読んだどなたかが、ひよっとすると、この出産における矛盾を合理的に説明しようとするかもしれませんが、神は「全く不可能なことを適えることを通して、その

御力の偉大さをお示しにしなければならないほど、この世が不従順であることを知っていらっしやった」のです。（これは凄いお言葉だと感じました）

神を信じれば、こんなに手の込んだ、手間暇かけた方法でなくとも、御自分の御業を進められるのではないかと思われませんが、神のなさった御業で、神が登場され、神を中心に進められなければならない舞台では、いつもこういう筋立てをお採りになります。

使徒ヨハネはこの世を「闇」という言葉で表現しましたが、それは真の光なる御方を見ようとしなない状態です。神を排除した状態です。自分たちの常識が全てであり、そのことで歴史を動かせるのだと考えている人間社会。人間が取り決めてしまい、皆がそうだと納得する現実に対し神は「打破し破壊なさる、打ち砕かれる」という態度で臨まれるのです。

アブラハムの出来事をぐるっと見て来ますと、その意味で大切な問題が沢山入っているわけですが。ここでは皆、一節毎にきっちりとまとめていますから、言葉としてはすごく簡素な表現ですが、内容を考えますと、実に大層な事柄なのです。

第⑩節後半、

約束をなされた方は真実な方であると、信じていたからです。

この手紙では「サラは信仰において立派だった」という意味で書いていますが、実は彼女はアブラハムほど神を信じていなかったのです。「子どもを産むよ」と言われたら即、「ご冗談でしょ」と笑ったのです。神は真実な御方なので、そのような女をも（いや、そのような女だからこそ）信じせしめてくださったのです。神が信じるように導いてくださらなければ、80歳というサラの現実の中で、神の受胎告知を信じ受け入れることは決して誰にも出来ません。

今日でも、社会常識、科学理論という背景を第一として生きている人々には、キリスト者といえども、その背景の壁は異常なほど厚く高いのです。

神に導かれて旅をして来たにも拘らず、サラはこと自分の問題になった時には、神からの素晴らしい啓示を、悪い冗談だと思った。つまり、一般論として信仰を語る時には立派なことが言えても、いざ自分の問題になるとそうはいかないことが圧倒的に多いのです。そういう人間を信じさせてくださる御方が<神>なのです。これは、本気になって聞いてゆかなければならない問題です。

今私が神を信じられるのは、素直さがあるからではなく、信じさせる御力を持たれる神が憐れんでくださっているからです。サラが神に憐れまれることによって、イサクの母となったように、神の憐れみによって、私も神を信じる者に変えられた。それが私たちの信仰の正しい受け止め方ではないかなと思います。（松山先生のいつもの強調点でした。）

第⑫節、

それで、死んだも同様の一人の人から空の星のように、また海辺の数え切れない砂のように、多くの子孫が生まれたのです。

これで確かにアブラハムにイサクが与えられ、神の約束はその子孫に受け継がれる御言として「然り」になるわけですが、「子どもたちに与えられる土地」は、まだ無いのです。ですから、ここまで読んできて「ああ、信仰って素敵だなあ」とはまだ言えないのです。イサクが与えられ、星の数ほど子孫が与えられる可能性が見えては来たけれども、その子どもたちが受け継ぐべき土地は、まだ彼の手には入っていない。約束の地を、自分の手にはしていないのです。「お前が歩き廻る土地をお前のものにして上げよう」と神は言われましたが、現実にはそれが手に入っていない。

でも「神が言われた以上、信じるぞ」という者たちをこの世に送って、受け継ぐべき信仰の財産を受け継がせてくださることを信じつつ歩んで行くのが、＜信仰＞の非常に大事なポイントになるのではないかなと思います。

信仰の問題で、アブラハムについて「マルチン・ルターが言っている言葉」を最後にご紹介して終わろうと思います。

「アブラハムはすべてを捨てて主に従い、すべてのものよりも神の御言を良しとし、すべてを越えて御言を愛し、自発的に旅人になり、いつも生死の危険に晒されたので、アブラハムはこの信仰の服従をもって、福音的生涯の最高の模範を示しています。」と述べています。

言い換えると「アブラハムが歩んだ歩みは、信仰によって平坦な喜びの道を・・・」などと聖書は書いていないのです。そうではなく、「アブラハムはどんな場合でも『神の御言が最高だ』と考えた。そしてそれを信じ、愛し、従って生きることを自分から選びとって、そのために旅人になりました。

だからいつも生死の危険を孕みながら、それをものともせず、生涯を歩み続けました。神が言われたのだからという理由だけで、彼はそれを為し続けたのです。だから、彼は『信仰の模範』なのです。」と書かれています。

しかし、そういう考え方は、ある意味では只ならぬ問題を孕んでいるとも思います。私たちの歩みにおいても、神を信じて生きるとはどんなものなのかを、この⑧節から⑫節のところまでに述べていますが、アブラハムという人物の物語は聖書の箇所です。非常に長いので、その中で今日は、神によって召し出され、神に従って、旅人として歩んだ歩みを中心にしながら、考えました。

神を信じるとはどういうことなのか、まだまだ沢山あると思いますが、基本的には、信仰は色々な場面、刹那で、神に従順であることによって確かなものにされてゆくものなのです。同時に、神に従うということは、私たちが日頃求めているような自分に都合の良いものではなく、むしろ犠牲や痛みを伴うものなのです。それは、主の御言にある「一切を捨てて、わたしに従いなさい」という鋭い命令の一語に尽きるようにも思います。

更に言うならば、「信仰は、大いなる冒険心と勇敢さをもって、神の御言にすべてを懸けて歩み出してゆくものでなければならない」ということです。どんなことがあっても耐え忍びながら、力一杯生きてゆくのが信仰なのだと言えるのです。

そして最後に第⑫節で言っているように、「不可能なことをも信じ切る信仰」が私たちの中にある限り、神に従って歩むのは難しいものだ、ということになるだろうと思います。

(1997年11月22日)

「神を賛美するため創られた」 説教者 森 容子

ヨハネ福音書21章⑮節～⑲節：

イエス様が十字架上で死を遂げられたのち、自分たちの為すべきことが見えなくなった弟子のペトロたちは、いったん漁師に戻ろうかと舟に乗り込みました。が、虚しさを覚えて一晩何も獲る気にはなれませんでした。が、その明け方、湖畔に立っている人物から大声での指示を受け、153匹もの豊漁が得られました。舟の上でヨハネから「主だ」と囁かれたペトロは、すぐさま上着をまとって勢いよく飛び込み、岸までの約100mを全速力でイエス様に向って泳ぎ着きました。そうして、彼はびしょ濡れで荒い息をしつつ、復活のイエス様と1対1で御対面しますと、にわかに、大祭司邸の中庭で、生前のイエス様のことを知らぬ存ぜぬと、三度も否んだ忌まわしい出来事が脳裏に甦ってまいりました。

女中さんたちに問われ三度も弟子なることを否認し、特に三度目は呪いの言葉さえも口にして徹頭徹尾主の弟子であることを否定した、あの日の自分の言動が……。そして「あの時、もし鶏が鳴かなかつたら、主を否む大罪の道を転げ落ちて行った自分は、一体どうなっていただろう。冒した罪に泣き崩れた自分を裁く者はもう一人もいなかった。すべては、主の御計らいだっただろうか。が、自分はもはや主の弟子である資格はない。」

しかし、このことはまだ、イエス様とペトロしか知らぬ事柄であり、前回、復活の主が二度に亘って現れられた隠れ家では、イエス様はそのことに触れられず、全く問題にされませんでした。しかし今回は場面が違い、主と弟子たちがお互いにリラックスした雰囲気の中にあり、イエス様がそれを皆に告げられるのも時間の問題のように、ペトロには恐ろしく思われたかもしれません。

「さあ、この私を、煮るなり焼くなり、お好きなように裁いてください。」そんな開き直った気持ち、あるいは、「穴があつたら入りたい、逃げられるものなら、今すぐにでも逃げ出したい。」そんな居たたまれない思いも、ペトロの裡には、同時にあつたかもしれません。

そんなペトロは、恐らく皆の端っこでうなだれて、せっかく主に用意して頂いたとびきりの朝食も、喉を通らなかったことでしょう。そんなペトロの様子のを、イエス様はじっと見守っておられたのです。

一本気で直情型のペトロには、身の危険も顧みず、主のためには何をしだすか分からぬような危うさがあることを、主はよくよくご存じでした。ゲッセマネの園でイエス様を捕えに来た兵士に剣で切り付け、耳を切り落としたペトロは、ヨハネ福音書13章③⑥～③⑦節でイエス様が「わたしの行く所に、あなたは今ついて来ることはできないが、後について来ることになる。」と言われた際も「主よ、なぜ今ついて行けないのですか。あなたのためなら命を捨てます。」と返答しましたが、この時の彼の偽らざる気持ちを、主は受け取ってくださっていたと存じます。

ですから、イエス様は何としてもペトロを守らなくてはなりません。主亡き後の弟子訓練、教会形成、世界宣教の上に、なくてはならぬ人物でありますから。「鶏が二度鳴く前に、ペトロが三度イエス様を知らないと言う」という御言は、むしろイエス様の御心による預言であられたのかもしれない。

とはいえ、主が愛された三大弟子のひとり、ペトロが冒した最大級の裏切りと背信の罪は、彼の懺悔の号泣をもって拭えるものでは決してありません。彼は生涯、否んだペトロ、否んだペトロと、自らからも他の弟子からも、後の時代の者たちからも、未来永劫、後ろ指を指される存在として、汚名を着なければなりません。それこそ、エレミヤ書における呪いの言葉「全世界の国々の嫌悪の的とし、わたしが追いやる国々で、呪い、驚愕、物笑い、恥さらしとする。」という現実が、必ずやこのペトロの上に及ぶことでしょう。

復活のイエス様は、このペトロに、深い悲しみと憐みを憶えられたのです。彼がいつまでも俯いていましたら、世界宣教どころではありません。それでペトロに次の質問をされたのです。「わたしを愛しているか」と。否んだペトロ、背信のペトロにもう一度、ご自分への愛をペトロ自身の口から告白させ、敗者復活のチャンスを与えるために、この湖岸にいらしてくださったのです。そこで主はペトロにそっと耳打ちし、二人だけのときを持たれました。

それでは⑤～⑦節のイエス様とペトロの会話シーンを味わいましょう。

⑤食事が終わると、イエスはシモン・ペトロに、「ヨハネの子シモン、この人たち以上にわたしを愛しているか」と言われた。ペトロが、「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」と言うと、イエスは、「わたしの小羊を飼いなさい」と言われた。

「わたしの小羊を飼いなさい」とは、CS教師などに任命されたことに喩えられるでしょう。

⑥二度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。」ペトロが、「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」と言うと、イエスは、「わたしの羊の世話をしなさい」と言われた。

「わたしの羊の世話をしなさい」とは、教会の役員、長老、執事などの役職を拝命したことに喩えられるでしょう。そして、

⑰三度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。」ペトロは、イエスが三度目も、「わたしを愛しているか」と言われたので、悲しくなった。そして言った。「主よ、あなたは何もかもご存じです。わたしがあなたを愛していることを、あなたはよく知っておられます。」イエスは言われた。「わたしの羊を飼いなさい。」

「わたしの羊を飼いなさい。」とは、御言を取り次ぎ、聖礼典を執り行う、牧師、神父、司祭などへの召命を与えられたことに喩えられるでしょう。

こうして⑮～⑰節において「わたしを愛しているか」という三度の主のご質問に、ペトロは三度「あなたをご存知です」という返答をし、特に三度目には「何もかもご存じ」という強調を付け加えました。ですが、「ご存じ」という言葉には、オイダ（「知っている」という一般的な表現）を使用しました。

ペトロは、主からの「私を愛するか？」という三度の問いかけに、自分の冒した大罪への糾弾を感じ、怖れおじまどって主の御前に目を伏せ、やっとの思いで「私があなを愛していることは、あなたをご存知です。」と、か細く早口で申し上げたのですが、それは「わたしを愛しているか」という御質問に対する真っ直ぐな返答にはなっておりません。

ペトロは、こうして三度ご返事をなしても納得されず、尚も自分の愛を疑っておられるに相違ない主に、言い知れぬ痛み苦しみを覚えて、そおっと目を上げたとき、目の前におられる主が、涙に潤んだ両目で、じっと自分を見つめてくださっていることに、はっと致しました。主の眼差しの中に自分の顔が映っており、主は断罪の御心ではなく、赦しと憐みの御心で、自分を包んでいてくださったことに気づき、胸を突かれました。

「ああ、この御方はわが師ではない。わが神なる御方だ！」と。

そうしてペトロは言葉を探しました。そして聖霊のお導きによって、厳かにこう申し上げました。「わたしが、あなたを、愛していることを、あなたは、よく、知っておられます」と。ペトロはここに、オイダ（知っているという一般表現）ではなく、初めて、ギノースコー（霊・肉・魂の深い交わりにおいて知っておられるという表現）を用いました。ペトロは、イエス様との霊的で深いお交わりの関係性を表わすこの言葉によって、イエス様を神様と仰ぐ、真正なる信仰告白を為したのです。そして主は、そのペトロに、既にC S 教師、教会役員、更に教会牧師という貴い召命をお与えくださっていたのです。

このことは、私たちも、お祈りの中で「主よ、あなたは私のことを誰よりもご存知です。私の髪の毛一本まで知っておられます。」などと述べる時、それが、単にオイダの「ご存じ」なのか、深い霊的な意味のギノースコーによる信仰告白なのか、よくよく自己吟味しなければなりません。お祈りを受け取られる側の主は、私たちの思いのすべてを知っておられるからです。

十字架に架かれたイエス様が、復活の御体をもって、この地に顕現してくださったのは、人類の罪責が確かに贖われ、そこに御赦しと解放が与えられたことを表明され、更

に、主御自身への愛の信仰告白へと導かれるためであったのです。主を完全数の三度呑んだ罪人にも、主は和解の美しい虹の橋をかけてくださっていることを、ペトロはついに知るに至った、ギノースコーの神を知るに至ったのです。

この主キリスト、神の御子なる御方を、ほめ讃えずにいられましょうか！

私たち人類は、イエス・キリストという神様をほめ讃えるために創造されました。これほど貴く、かように麗しい使命は、他にはありません。祈りのすべて、礼拝のすべて、御言のすべてが、このことを謳っています。

最後に、詩編102：⑰～㉑をもって、共に主をほめ謳いましょう。

主はまことにシオンを再建し、栄光のうちに顕現されます。

主はすべてを喪失した者の祈りを顧み、その祈りを侮られませんでした。

後の世代のために、このことは書き記されねばならない。

「主を賛美するために民は創造された。」

主はその聖所、高い天から見渡し、大空から地上に目を注ぎ、
捕われ人の呻きに耳を傾け、
死に定められていた人々を、解き放ってくださいました。

天使たちもこう叫びます。「屠られた小羊は、力、富、知恵、威力、誉れ、栄光、そして賛美を受けるにふさわしい方です。」と。

私たちの罪の身代わりに酷い十字架刑を受け入れられ、陰府に下られて死に定められていた死霊たちに福音宣教を行われ、そして、御父によって復活を成し遂げられた主イエス・キリストに、賛美の黙祷をお捧げ致しましょう。

写者あとがき

今回は写書の途中で、突然、松山幸生先生の説教をお聞きしたくなりました。そこで、松山先生を尊敬され、先生に導かれて牧師になられた日本基督教団峽南教会の森容子先生にその旨をお願いしました。真に相応しい説教を特別に掲載させて頂きました。有難うございます。

森先生は私のこの写書を推敲して下さって導いてくださっている方です。私は二人の師に恵まれてこの壮大な業をさせて頂いております。そして信仰を養って頂いております。

晩年の松山幸生先生に創世記の説教を月一回お聞かせ頂いた思いが今、胸に迫ってきます。アブラハムがなぜ信仰の父と呼ばれるかについては沢山の書籍があります。

松山先生は「神の啓示自体を恭しく愛の応答をもって受け止めて行くこと、更に積極的にその啓示に対して揺るぎない確信、確固たる信頼を抱くこと。その意味は、たとえ現実はその啓示とは全く相反した状態にあらうとも、唯、神を信じる意志を貫いてゆく、そのような密度の濃い関係において神と共にあることが<信仰>なのだ」と説いてくださいます。松山幸生先生はまさにそのような道を歩まれてこられました。

「神の歴史の第一歩」は行き先も知らず、最良のものを捨て去って出発したアブラハムの信仰にある。どんな小さな貧しい者と思われていても、歴史の中に価値を見出すことはできる。「わたしがお前に語りかけ、わたしの言葉がお前を動かしているという事実の中で」私たちは存在価値を見出すことができるという希望を語って頂いています。

アブラハムはこの世的に大成功を遂げたのではない。唯一所有した土地はマレムの墓地で生涯幕屋に住む旅人であったが「神が設計者であり、建設者である堅固な土台をもつ都を待望して」それを約束の地として信じた。私たちはそのようなく信仰を神の憐れみと慈しみによって与えられた。私たちが選んだのではなく、神がイエス・キリストにおいてお与えくださったのです。その信仰は色々な場面、刹那で神に従順であることによって確かなものにされてゆくとの道も教えてくださっています。

神の愛の深さ、広さ、大きさを森容子先生の説教から教えてくださっているのも大きな恵です。お二人の先生に深心の感謝をいたします。（2023年5月20日 小原靖夫記）